2025 年2月9日 労伝デイ講壇交換礼拝（降誕節第7主日礼拝）メッセージ
「神の約束とは美しい調和である」　　いずみ教会・永富美加牧師
聖書 マタイによる福音書 20 章 1－15 節

今日は、皆様と「ぶどう園の労働者のたとえ」を皆様とともに聴いていきたいと思います。このたとえ話は、なにか作り話のように聞こえるかもしれませんが、実は、当時のパレスチナのある時期によく起こったことを背景としています。パレスチナでは、ブドウが熟すのは9月だそうです。そのあとに雨期がやって来ます。ですから、雨が降る前に、急いでぶどうを取り入れないと、せっかく苦労して実ったぶどうが腐ってしまう……。そこで一刻を争う収穫期には大勢の人手が必要とされ、時には一日1時間しか働けない人でも大歓迎されたそうです。賃金は1デナリオン 平均的な一日の労働代金に相当します。現代に換算すれば、1万円ほどとされています。

今日の個所3節、6節で「なにもしないで広場に立っている」という表現があります。この言葉だけをきくと、ともすれば、なにもしないで広場に立っている」……怠けて立っている、時間を浪費しているのか……そういうことではありません。パレスチナでは、市場が労働市場になっていた。働きたいという人は、朝、道具をもってここに集まり、誰かが雇ってくれるのを待っている。そういう現場がここにある。仕事を待っていても、声がかからなければ、ずっとその場に居続けなければならない。そのために、5時まで待っていた。何らかの事情で、声がかからなかったのかもしれません。雇い手は、できるだけ多く収穫するために人を選別するでありましょう。「ブドウ園で働くには、この人は、ちょっと体力がなさそうだ……」、「ブドウ園で働くには、この人の背丈では、無理だろう……」。ブドウ園で働くための条件に合致していない人は、容赦なく除外されてしまう、ということが当時からあったのでしょう。「広場で立っている」……声がかかるのを待ち続ける。この人たちは、どれほど切実に仕事を求めていたでしょうか……。

ここで仕事を待っている人たちの日々の生活は非常に厳しいものがありました。その意味で立場を弱くされた人たちであった。当時、奴隷、使用人という立場に置かれた人たちも存在していました。その人たちは、彼らを管理する家族に属していました。彼らの生活は、家族に左右される。それはそれで、ひどい家族にあたれば、大変であることは確かですが、それでも、普段は飢えるという心配はありませんでした。ところが、ここに登場する労働者の人たちは、仕事にありつけない場合は、餓死する可能性さえあったようです。生きていくため、貯金をする余裕もない。もし、家に子どもがいたら、食べさせることはできない状態にさえあった。ですから、一日の失業は、深刻な事態を引き起こす可能性がありました。このような切実な状

況が、ここにはあるということ。
　時間が出てきます。ユダヤでは普通の労働時間であったようです。ユダヤの一日は、午前6時には始まり、午後6時までを1日とします。午後6時を過ぎると、翌日になる。午前6時から3時間経過するごとに、午前9時、午後12時、午後3時……。午前6時から11時間後が午後5時。今日のたとえ話に書かれているのは、雨期を前にしたブドウの収穫期には、ユダヤの村の市場ではよく見かけられた光景であったようです。
「なにもしないで広場に立っている」……。古い時代から労働市場があった。ここに集まり、誰かが雇ってくれるのを待っている。そういう現場がここにある。仕事を待っていても、声がかからなければ、ずっとその場に居続けなければならない。現代版の労働市場……その典型として、1990年代ごろから急激に増えだした非正規の働き手の方々がおられます。1990年代から日本の労働市場は大きく変化を遂げ、政府は規制緩和により、「労働者派遣法」を改正したようです。今の90歳代以上の人たちは、一定数、それ以前の日本型の雇用形態のシステムの中、つまり「新卒一括採用」、「年功序列型賃金」、「終身雇用」で生きてきた人たちです。戦後は高度経済成長もあり、ある程度安定した雇用状況にあったのではないか。しかし、現代では、「労働者派遣法」が拡大し、日本型雇用形態は崩れさりつつある。特に新型コロナウィルス感染症が拡大した2020年では、「派遣切り」が横行しました。仕事がしたくても、ある日、突然、解雇を言い渡される。労働市場では、病気になれば、働くことはかなり困難だと判定されるでしょう。ほかにも、様々な事情で、働きたくても働くことがかなわない人も、います。
　現代の日本には、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、「誰も雇ってくれないのです」という悲痛な叫びをあげている人が、大勢おられるのではないでしょうか。「誰も雇ってくれないのです」というブドウ園の労働者の人の声は、同時にこの時代を生きる悲痛な叫びと重なり合っているのではないでしょうか。
　今日の個所でのポイントは、

> 「そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった」（マタイ20：9－10）

と記された、この部分にあるでしょう。労働市場の中に組み込まれている私たちも、何気なく一読するだけでは、「どうして、後から来た人たちと最初から働いている人たちの賃金が同じなのか」という疑問を抱くかもしれません。ここで登場する家の主人は、9時、12時、午後3時、午後5時と広場に見に行っています。とりわけ深

刻なのは、午後5時の人でした。ずっと仕事を求めていた人たちでした。
今日、働いて一日の賃金をもらわなければ、生活が立ち行かない……。子どもたちに満足に食べさせることができない……。何とか仕事を見つけなければと、午後5時まで立ち続ける……そのような過酷な状況に置かれている人が大勢いる。だからこそ「子ども食堂」が流行っているといってもいいのではないでしょうか。
一番長く働いていた人たちが抗議します。マタイ 20:12

「最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。」

「まる一日、暑い中を辛抱して働いた」……確かにパレスチナの雨季の前には暑い南風が吹くようです。ですから、暑い中をまる一日辛抱して働いた……というのは、事実でありましょう。彼らは、激怒して、ブドウ園の主人がいる場所まで、出向いて押しかけていった。恐ろしい形相で、激しく怒って主人に、こう迫った。

「まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは」（マタイ 20:12）

ブドウ園の主人は、返答します。

「友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと1デナリオンの約束をしたではないか」（マタイ20：13）

主人は、激しい怒りを向けている人に対して、落ち着いて返答し、驚くべきことに「友よ」と呼びかけています。「あなたとわたしと1デナリオンの約束をしたではないか」とあります。確かに最初の2節には、「主人は、一日につき1デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。」とあるのです。つまり、労働者はどの人にも、一日につき1デナリオンずつ支給されると捉えていいでしょう。それが重要なポイントでありましょう。
「約束」とは、「美しい調和」である。1デナリオンの「約束」。「約束」という言葉です……原文にはありません。そのまま訳すと、「主人は、一日につき1デナリオンで、労働者をブドウ園に送ることを承認した」……ちょっとわかりにくい表現ですけれども、「承認した」という動詞には

symfono　　sym…共に、 fono…phone 響く

そこから派生した言葉は symphony。つまり「シンフォニー」という意味が込められいる。「シンフォニー」……オーケストラで思い出される方もおられるでしょう。一言でいえば、オーケストラで演奏される大規模な楽曲です。オーケストラは、フルート、オーボエ、クラリネット、ヴァイオリン、ヴィオラ、トランペット、トロンボーンなど点々な楽器から編成されます。様々な楽器が演奏されますが、それぞれの音が調和をもって一つの曲として演奏されます。そして、美しいハーモニ―となって、私た

ちの心を揺り動かします。なぜか。そこに、どの楽器もその楽器に応じた美しい旋律が奏でられている。邪魔をせず、それぞれの音の美しさを生かしあいながら、「共に響きあう美しい調和」が存在しています。しかも、「「シンフォニー」は、一つの作品として成立しています。このことを、「約束」だと言っています。直接、約束という意味は、原典にはないようです。ですから、このことを考え併せますと、神様のもとでは、それぞれの人たちが「共に響きあう美しい調和」がある。マタイは、それを「天の国」と表現しているのです。神様は、9時から来た人も、12時から来た人、午後3時から来た人、さらには、午後5時から来た人にも、それぞれ1デナリオンずつ渡すのです。それが…天の国であり、「共に響きあう美しい調和である」と仰っているのではないでしょうか。ちょうど、美しいシンフォニーのように。

しかも、神様は、「最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい」と言われました。そこには、5時からやっと仕事を見つけた人の日々の生活の苦しさを神様は、深く配慮されているからでありましょう。

> 「あなたは隣人を虐げてはならない。奪い取ってはならない。雇い人の労賃の支払いを翌朝まで延ばしてはならない」（レビ記19：13）
>
> 「賃金はその日のうちに、日没前に支払わねばならない。彼は貧しく、その賃金を当てにしているからである」（申命記25：15）

支払いを翌朝にまでのばしてしまうと、餓死をする恐れさえあった人も含まれているでしょう。貧しく、弱い立場におかれた人々を保護するための神の律法だったのでしょう。「最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい」。今日の私たちが生きる労働市場の論理とは全く異なっています！

> 「自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか」（マタイ 20:15）

この1節も、今日の個所のまとめを言い表しているかもしれません。ここでは、直訳すると、「私にとって善、美しいことが、あなたの目からみて悪なのか」。つまり、神様は、9時から来た人も、12時から来た人、午後3時から来た人、午後5時から来た人にも、それぞれ1デナリオンずつ渡したいということ。それが、神様の目から見て善であり、美しいことであると。このことを、神様は望まれていること、5 時から来た人も誰に気兼ねもせず、喜んで1デナリオン受け取る。そのことについて、9時から来た人、12時から来た人もみんな認め合う。一人ひとりが、その人らしく。誰にも気兼ねせず、活き活きと働く。それをお互いに認め合う。それこそが、「共に響きあう美しい調和」であり、神様が望まれる「天の国」の姿ではないでしょうか。私たち、一人ひとりが神様から呼びだされたものとして、「天の国」の建設のための働き人でありたいと願います。